

清流

校訓：躍進

八束小学校 学校だより
令和7年3月12日
No.26 文責：益永



東日本大震災から14年目を迎えた昨日、午後2時46分に全校で黙とうを捧げました。震災後に生まれた子どもたちですので、次のような話をし、「3.11を忘れない」という思いを共有しました。



みなさん、今日は何の日でしょうか。浦田先生という素敵な人が誕生したおめでたい日であり、一方で、多くの人の命が奪われた日でもあります。今から14年前の今日、午後2時46分に東日本大震災が起こりました。2分近く揺れた大地震により、津波や火災が発生し、多くの命が失われました。この震災で亡くなられた方は、四万十市の人口の半分以上、2万2千人余りと言われています。14年たった今でも、行方不明の方や避難生活をしている人がたくさんいらっしゃいます。

この悲劇を忘れないように、今日は、地震が起こった午後2時46分に、みんなで「黙とう」を捧げたいと思います。黙とうとは、1分間、目を閉じて亡くなった方や今も行方不明の人たちのことを思いながら手を合わせることです。なぜ、黙とうをするのかというと、震災のことを忘れてほしくないからです。私たちは、地震や津波によって家族や家をなくした経験がありません。津波に飲み込まれる人や流される家を、実際に自分の目で見たこともないですね。しかし、私たちが生きている間には必ず、東日本大震災と同じ、もしくはそれ以上の大きな地震が起こると言われています。昨日まで当たり前だった「普通の暮らしと時間」が一瞬の内に奪われる経験をするようになるのです。だからこそ、この経験を悲劇で終わらせるのではなく、教訓として心に留め、生かすことが大切だと考えます。例えば、

- ・「今いる所は大丈夫」と思わないこと
- ・周りが逃げていなくても津波がくると思ったら声をあげながら真っ先に逃げる
- ・できるだけ高いところに避難すること

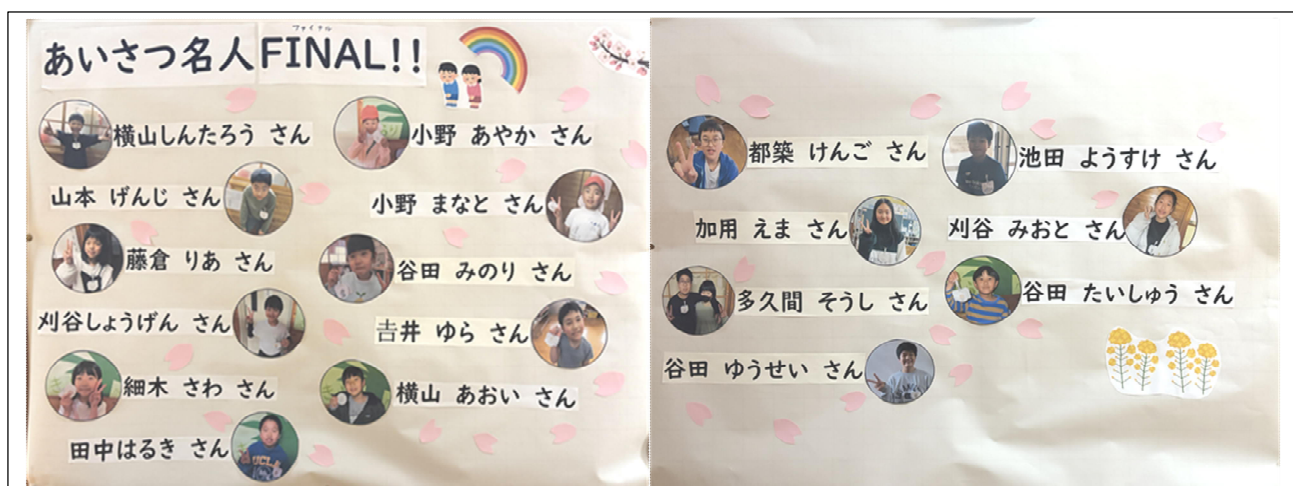
これは、東日本大震災で助かった釜石市の小中学生がとった行動です。地震は、いつ、どこで起こるか分かりません。「危機脱出」のモデルケースとして覚えておきましょう。

それから、もう一つ心に留めてほしいのが、普段何気なく過ごしている一日は、誰にとっても貴重な一日で、その時その時を大切に生きることが一番重要だということです。蛇口をひねれば水が出る、スイッチを押せば明かりがつくこと、毎日3食ご飯が食べられること、勉強ができること、家族や友達・先生がいること等、これら全てが「当たり前のこと」ではなくなるのが大震災です。だから、今、嫌なことがあっても「当たり前のこと」に感謝し、「ありがとう」と言える毎日を送ってほしいと思います。「当たり前のこと」に「ありがとう」の気持ちが持てると、今日一日を一生懸命生きようと前向きになり、嫌なこと・困難なことがあっても頑張れるようになります。3学期も残り少なくなりました。貴重な一日一日を丁寧に過ごし、感謝の気持ちを持って生活していきましょう。

☆☆☆ ～ 「あいさつ名人」ファイナル ～ ☆☆☆

12月からスタートした「あいさつ週間」。全教職員から「気持ちの良いあいさつができた」と認められた児童を「あいさつ名人」に認定する取組も、先週で終わりました。

第1回は10名の名人が誕生し、盛り上がりを見せましたが、第2回(2/3～7)は2名しか名人が誕生せず、第3回(3/3～7)はどうなることかと思いましたが、上級生を中心にレインボーのあいさつ(立ち止まって笑顔で)が増え、18名の名人が誕生しました。その中でも、山本げんじさんと横山しんたろうさんは、「あいさつ名人」3連覇でした。



あいさつは人と人の関係を築くうえで重要な役割を担っています。就職してもビジネスマナーとして、あいさつは避けては通れません。あいさつ一つで人生を左右することだってあるかもしれません。「あいさつは人からよりも自分から」を心がけ、これからも学校だけでなく、家庭や地域からも認められる「あいさつ名人」であってほしいです。

入賞おめでとう!

入賞作品



旧幡多郡の7市町村の出身者等により結成された「土佐幡多の会」が、～四万十町を含む広域幡多が一丸となって地域を元気に!～をテーマに、毎年、5・6年生を対象として絵画募集を行っています。

本年度は、6年生の加用 永真さんの作品が「学校優秀賞」に選ばれました。絵から永真さんの文旦愛と甘酸っぱさが伝わってきます。

【作品の説明】宿毛市は、ぶんたんが有名なのでかきました。
ぶんたんは、すごくおいしいです。(加用 永真)

～ 高知新聞「読もっか」掲載おめでとう!～

6年：加用 永真さん 3月11日 文『金曜日が楽しみ』